

移ろう

古来から日本文化は空間・場の流動性をもつ。地鎮祭や歴史ある祭事など、ある日は神主による儀式で「何もない場所」が「神の宿る場所」となりある日は「道路や山」が「生きる喜びを分かち合う場所」となる。
また、かつての町屋建築のように昼間は「ミセ」が夜になると「イエ」となるような時間帯による2つの世界の混同が起こっている。

そのような場所は、人々の記憶が重なり、心の自由や目に見えない豊かさで満たされている。
これらをガラスのある日常で考えるとどうだろうか。

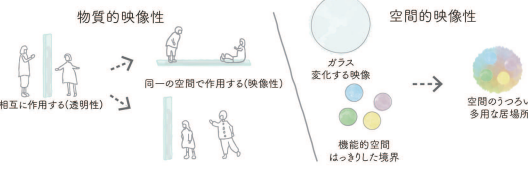
現在の都市では機能が決まった部屋、動くことのない固定された空間が並び、部屋の広さが豊かさであると認知されてしまっている。
そこで建築による人の生活の豊かさをガラスの映像性一場の意味のうつろいによって提案できるのではないだろうか。

1. 移ろいがもたらす都市への影響



敷地は高円寺の一角とする。高円寺は建物が密集した地域であり、都市の一面を持ちながら地方のような開けをもつ場所である。
一方で道路が狭く、1階が店で2階が住宅という形式をもつ建物が並んでいる。車は東京が発展した要素の一つであり、火災などにおいては問題があるが、家と家に近いことは良い面もある。
ガラスの挿入によって敷地境界線が見えなくなり、生活空間が外にはみ出す。高円寺は歩行者天国になる場所が多く、敷地内の道路が該当する。敷地を越えたガラスは周辺環境もよくよくと広がり、建物は密着せず生活空間が密着し多くの関係性を生み出す。

0. ガラスの映像性



ガラスの物質的映像性により、静止した状態だけでなく、常に変化し続ける状態が映し出される。
この関係はガラスを介して作用することに加えて、同一空間においても作用する。

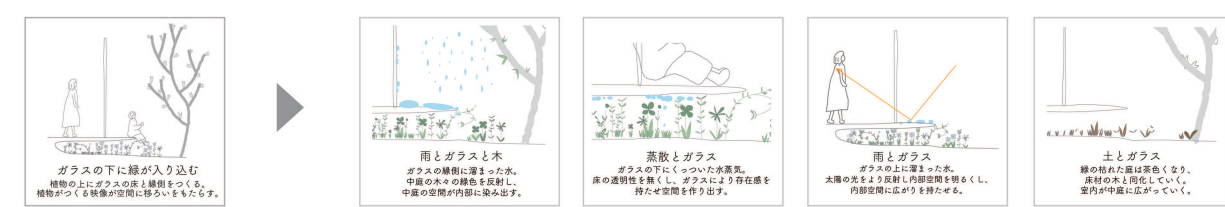
これを部屋に重ねることで、機能的境界に囚われない豊かな空間を生成する。
自然を媒体としながら建築の存在が消えてゆく。
1日、季節などの時間の変化によって様々な空間が混じりあり、限りのある空間に多様な居場所を作り出す。

3. 外に広がる移ろい

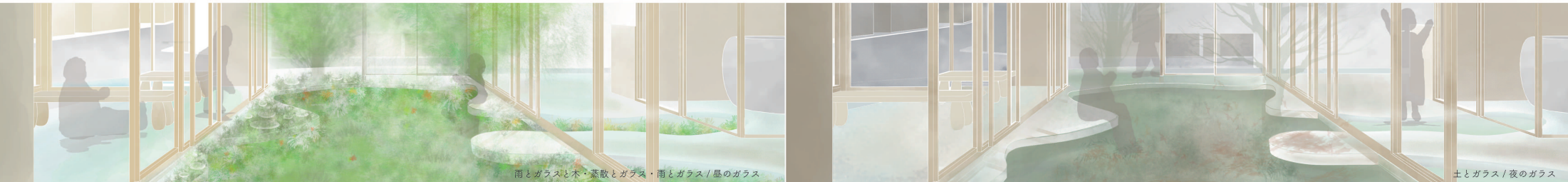


敷地境界の上のガラス空間の異なる境界面にガラスの床を重ねる。影がなくなることで、境界が薄れ、外の人が気軽に中を体験する。影がなくなることで、境界が薄れ、内外の境界に移ろいが生じる。

2. 内に広がる移ろい



内外の移ろいの変化 - 夏の一日 -
ガラスの機能変化を色で示した。濃淡や色が時間によって緩やかに移ろう空間は機能的空間を超えて内外、内内の関係を作り出す。 ■ イエ ■ ミドリ(植物) ■ ミセ



雨とガラスと木・蒸散とガラス・雨とガラス/風のガラス

土とガラス/夜のガラス